



ターナー展

東京都美術館

2013年10月8日～12月18日

10/12 記

ジョゼフ・マロード・ウィリアム・ターナー(Joseph Mallord William Turner 1775.4.23～1851.12.19)はイギリスのロマン主義画家。にわか雨の景色にジェイムズ・トムソンの詩を、イタリアの風景にバイロンの詩を添え、ローマの詩人アエネイスを好んだ。当時画壇は「風景は自然を写すもの」と考えたが、彼は「思考や感情に訴えかけるものだ」と主張した。出世欲旺盛で、巨匠と並ぶことを好んだが、フランス革命戦時下には敢えてクロード・ロランに倣った牧歌的田園風景が必要だと考えて描いた。ラファエロ没後300年には、歴史画の要素を取り入れて彼とその功績を描いた。カルタゴの捕虜となったレグルスを失明させた強烈な光を描いた絵は賛否両論。ナポレオンの絵と画家の水葬の絵は「戦争と平和」の対比。戦争の悲劇を描いたが、軍人をはっきり描かないことで抗議を受け、以来王室からの仕事なし。オランダ絵画の影響を受けた海景画では嵐という自然の猛威をよく描き、消えゆく生命に似たヴェネツィアの夕暮れを好んで描いた。好きなクローム・イエローを多用し、伝統と革新を旨に勤勉に描いた。



26歳でロイヤル・アカデミー正会員。旅の縁は希望に反してフランスが多かった。(左：チャイルド・ハロルドの巡礼—イタリア)